

【高レベル放射性廃棄物最終処分場選定の文献調査への応募に反対します】

今日（2020年8月13日）の北海道新聞朝刊を読んで、驚いた。食欲が失せた。仕事も上の空となった。帰宅して、すぐにパソコンに向かっている。現在、『続寿都歴史写真集 昭和21年〜』の編集の追い込みにかかっており、多忙を極めているにもかかわらず、こんな文章を書かねばならない。時間を返せ、と言いたい。

道新によると、「核のごみ最終処分場 寿都町が調査応募検討」という。町長インタビューでは、「あくまで文献調査応募の話」で「財源が見込めることが一つの魅力」とのことだが、はたして、それで済むのだろうか。一歩踏み出すことにより、概要調査、精密調査、決定へと進んでいくことを私は危惧する。

国の地震調査研究推進本部は、後志管内寿都町から渡島管内長万部町に分布する黒松内低地断層帯が今後300年以内にマグニチュード7.3以上の地震を起こす確率を20~40%以下だと指摘している。そんな将来の話と思われるかもしれないが、高レベル放射性廃棄物はその100倍以上の期間に渡って管理し続けねばならない。「将来の町民のことを考えれば議論しなきゃいけない」と町長は言っているが、逆ではないかと思う。将来の町民のことを考えれば、そんなものに応募するべきではない。

町民4人に電話したところ、いずれも「新聞を読んで知った」「寝耳に水」「住民説明会なんて知らない」とのことだった。「文献調査なら応募してもいいのかな」と考える人もいる一方、「豊かな海でお金をいただくことを考えるべきだと思いますよ」という人もいる。「町長は政治屋だから、アドバルーンをあげて、様子見しているんでしょ」という声もあった。様々な意見があることは私も承知しているが、高知県東洋町の先例が気になる。

2007年1月に文献調査に応募した高知県東洋町では、推進派、反対派の激しい対立が起きた。主導した町長は辞職し、新町長が誕生したが、その年は神社祭が中止になるまでに揉めたという。こういった大きな政治的対立が生まれる課題では、町外から色々な個人・団体がやってくる。町民の平穏な生活が大きく乱されるだろう。3000人たらずの町が否応なしに推進派、反対派に分かれるだろう。町民同士が争うのを私は見たくない。

寿都の持つ力はすごいと私は思う。寿都の寿牡蠣以上に美味しい牡蠣は日本のどこにもない。コウナゴの生炊きしらすにしても、他地域の佃煮は、あんなに繊細に作られていない。飯寿司も寿都がいちばんである。漁業者や水産加工業者、もちろん役場関係者も含めて、並々ならぬ努力があったはずだ。さらに山の幸にも恵まれ、川にはアユやヤマメが泳ぐ寿都町は日本一の町である。それを活かす町づくりにこそ取り組むべきだ。

私の大阪の両親からも連絡があったところを見ると、今回のニュースはすでに全国で流れているらしい。こんなことで寿都が有名になってほしくはなかった。私は、町の歴史を調べ、本を書いてきて、寿都の知名度の上昇にすこしは貢献したかと思ってきたが、それをはるかに超えてしまった。

今日の寿都町は、いつも通りのお盆で、いたって平穏だったという。いま、撤回するなら、町を二分するような揉め事にはならない。文献調査への応募はやめてほしい。今年の例大祭の渡御はコロナのために中止になったが、来年はあると信じている。

山本竜也（『寿都五十話』『寿都歴史写真集』著者）

参考リンク

- 地震調査研究推進本部 地震調査委員会「黒松内低地断層帯の長期評価について」
https://www.jishin.go.jp/main/chousa/05apr_kuromatsu/index.htm
- 西郷貴洋他「高知県東洋町における高レベル放射性廃棄物処分地決定に係る紛争の対立要因と解決策」（『社会技術研究論文集』7巻、2010年）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/sociotechnica/7/0/7_0_87/_article/-char/ja/